

書評 Adeeb Khalid, Islam after Communism: Religion and Politics in Central Asia

著者	河原 弥生
権利	Copyrights 日本貿易振興機構（ジェトロ）アジア 経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) http://www.ide.go.jp
雑誌名	アジア経済
巻	49
号	8
ページ	73-77
発行年	2008-08
出版者	日本貿易振興機構アジア経済研究所
URL	http://hdl.handle.net/2344/00007238

Adeeb Khalid,

Islam after Communism : Religion and Politics in Central Asia.

Berkeley – Los Angeles – London : University
of California Press, 2007, xv+241pp.

かわ はら やよ い
河 原 弥 生

はじめに

本書は、ソ連崩壊後の中央アジアのイスラームについて、歴史的観点から論じたものである。アメリカにおいて支配的な、9.11事件以降顕著になった、イスラームを安易にテロリズムやアル・カーイダなどの過激派と結び付けるようなジャーナリズムや国際政治学におけるステレオタイプの解釈に多角的に反論し、中央アジアのイスラームについて論じる際には、彼らが70年に渡って経験してきたソ連という時代を無視してはならないと警鐘を鳴らす。

本書の著者アディーブ・ハーリド氏は、アメリカのカールトン・カレッジの歴史学教授であり、主な専門は19世紀末から20世紀始めにかけて中央アジアで起こった改革運動、「ジャディード主義」の研究である。氏は1993年にウィスコンシン大学で、『イスラーム文化改革の政治——中央アジアのジャディード運動——』で博士号を取得し、98年に同名のモノグラフを刊行している [Khalid 1998]。また、現代中央アジア研究の分野でも、本書のもとになっている「世俗イスラーム——ウズベキスタンにおける民族、国家、宗教——」 [Khalid 2003] など、多数の論文の執筆で知られている。

本書は、アメリカの一般読者を対象とした概説書であり、専門的な研究書ではないが、ロシア帝国征服以前の年代記に始まり、ジャディードたちの著作や、近年のイスラーム主義運動の活動家たちによる

出版物、諸機関の報道記事などの多様な資料を利用し、著者の専門とする時代以外の部分については、歴史学、人類学、宗教学研究に携わる研究者たちの最新の研究成果を踏まえてわかりやすく説いたものである。

I 本書の構成と内容

本書の構成は以下のとおりである。

序 章

第1章 中央アジアのイスラーム

第2章 帝国と近代化の挑戦

第3章 ソヴィエト政権のイスラーム弾圧

第4章 民族遺産としてのイスラーム

第5章 イスラーム復興

第6章 反対派の中のイスラーム

第7章 反テロリズムの政治

結 論 アンディジャン事件とその後

以下に、本書の内容を簡単に紹介したい。

まず序章では、本書の目的や章の構成について、またなぜ中央アジアの歴史に着目するのが述べられている。著者は、ソ連時代の70年間は社会や文化が激変し、中央アジアが他のイスラーム世界から切り離された時代であることを指摘する。にもかかわらず、西洋社会は9.11以降、イスラームを過激な軍事行動と結び付けずには語らなくなっており、また、それ以前からもイスラームを、何か一般化可能な「本当のイスラーム」に集約できる（著者はこれを「本質主義」と呼ぶ）という偏った評価をしてきたと批判する。実際にはムスリム社会は、世界の近代化とともに初めてイスラームを客観視するようになったのであり、イスラームが政治イデオロギーになったり、あるいは暴力を伴ったりするようになったのは極めて最近の傾向であると指摘し、歴史を無視する「本質主義」を議論の前提とすることに異議を唱えている。

第1章においては、ロシア征服以前の中央アジア社会とイスラームの結び付きのあり方が論じられる。ヒヴァ・ハン国の年代記の記述を例に挙げ、ロシア

征服以前の中央アジアの人々にとって、ムスリムであることはムスリム共同体の一員であることであり、アイデンティティは共同体のそれであったと指摘する。また著者は、このような特定の地域のイスラームを分析することについて、近年の人類学的研究の成果に触れ、そこでは「中央アジアのイスラーム」、もしくは「十分に浸透していないイスラーム」という主に2つの見解が支配的であるとする。そして双方とも、その対極により厳格な「アラブ・イスラーム」や、「本当のイスラーム」が存在することを想定しているが、このいずれもが、現象としてのイスラームを理解するのに役立たないと批判する。むしろ分析の際の課題は、どのようにその社会でイスラームの宗教権威が設定されているのか、どのように誰によって宗教知識が生み出され、伝達されるのか、であると述べる。何が彼らにとって「本当のイスラーム」なのかは、極めて文化的、社会政治的な問題であるという。そして、8世紀のアラブ軍の侵入から、ロシア征服以前の中央アジアのイスラーム化の過程について概観している。

第2～3章は著者の専門とする時代である。第2章においては、ロシア帝国期のイスラームについて述べられている。1865年以後、中央アジアは、保護国の地位に甘んじたブハラ、ヒヴァ両国以外の地は、ロシア帝国領トルキスタンとしての道を歩み始めた。しかし、帝国にはタタール人等のムスリム臣民支配の経験があったにもかかわらず、中央アジアについてはイスラームを無視する方針をとった。経済面では、トルキスタンはこの時期に飛躍的發展を遂げ、宗教施設が新築されるなど現地ムスリム社会にも貢献があった。著者は、共同体としてのムスリムにイスラームを実践するための余地が残されている限り、ロシアの統治は受容できるものであったと分析する。一方で次第にムスリムのなかからは改革論が芽生えた。著者はフィトラトラを例に挙げつつ、改革論者たちが行った新方式学校を軸とした「ジャディード運動」についても紹介している。この運動は現地社会に容易に受け入れられたわけではなく、伝統的な秩序を不安定化させるとして、伝統的教育に携わるウラマーたちとの軋轢を生んだ。また、アフガーニ

ーやムハンマド・アブドゥッらの提唱した改革思想や、「ワッハーブ主義」などの原理主義についても触れている。そして最後に、ロシア統治期の民衆反乱を取り上げ、当時の反乱はむしろ民族的色合いを帯びたものであって、イスラームは問題とはならなかったとしている。

第3章は、ソ連初期のイスラームへの弾圧と大粛清について述べている。ロシア革命は、中央アジアにおけるイスラームのあり方を再定義した。ここではまず、革命の中央アジアへの波及の様子が概観され、ボリシェビキとジャディード活動家のかかわりが検討される。多くのジャディードは政治には直接関与しなかったが、言語改革、学校運営などの文化部門を担当した。両者は、近代学校の設立、女性の地位改善などの点で一見目的を同じくしていたが、その方法や最終目標は異なっていた。ボリシェビキは1924年に中央アジアにその民族構成に従った新しい5つの共和国という新たな政治的枠組みを作ったが、ジャディードのほとんどは30年代の大粛清の対象となった。両者が協調できない最大の点は宗教問題であった。ジャディードは信仰の現代化を目指していたが、ボリシェビキは宗教そのものを否定したためである。その後、あらゆる宗教指導者、宗教施設への攻撃が始まった。ボリシェビキは女性にヴェールをはずさせ、農業の集団化を強行した。大戦中は、短期的にはあれ、体制側が譲歩し、宗教施設の再開が許可され、体制の管轄下において「中央アジア・カザフスタン・ムスリム宗務局」(SADUM)を開くことも認められた。この時期に中央アジアのイスラームは、地方化され、習慣や伝統と同義にさせられ、社会の強力な脱イスラーム化がはかられたとまとめている。

続く第4～5章ではソ連後期のイスラームが検討される。第4章においては、主にブレジネフ(1964～82年)の安定期におけるイスラームの変容が取り上げられている。ブレジネフ期には、各共和国で当該民族出身の指導者が長期間在任し、その間、民族アイデンティティの成熟がみられた。この頃より、中央アジアにおいてイスラームの儀礼は、「民族文化」として生き残ることになり、ムスリムであるこ

とは重要なアイデンティティとなったが、それは民族アイデンティティと同義でもあり、また、ソ連市民であることも全く矛盾せず、その絡み合いは政治的な保守主義を作り出したと指摘する。SADUMは極めて限定的な活動が続けるに留まった。一方、この頃、大粛清を生き延びたものの、SADUMに加わらなかったウラマーの一部が、秘密裏に弟子の指導を始めた。そのうち最も著名な活動家、ダームラー・ヒンドゥースターニーの名で知られる、ムハンマドジャン・ルスタモフが紹介されている。総じて、ブレジネフ期にはこのような過程を経て、イスラームが確実に「慣習」と同義語になっていったと述べている。

第5章においては、ゴルバチョフ期(1985～91年)からソ連崩壊期のイスラームをめぐる環境について述べられている。この時期には各共和国の民族伝統が再評価されたが、もはや中央アジア人にとっての民族遺産の再発見は、イスラームの再発見と同義であり、「イスラーム復興」は民族的な現象であったという。ペレストロイカやグラスノスチが進み、中央アジアの人々も一定の宗教的自由を享受したが、それは民族遺産の再発見であり、民族アイデンティティの主張の一部であった。そしてそれは、主に言語の純化運動や歴史の再評価という形で表れたにすぎず、直接的なイスラームの政治化ではなかったことが指摘される。また、外国のムスリム組織がこの頃から中央アジアでの活動を行ったことが詳述される。そして独立諸国は、経済、組織、政治構造のあり方、社会的公的な政治態度、国家と社会との関係など、あらゆるものをソ連から遺産として受け継いでおり、イスラームやイスラーム復興についての認識もしかりであるという。

現代のイスラームを扱った最後の第6～7章については、現地の研究者の最新の研究に負う部分も多い。第6章では、ソ連崩壊と中央アジア諸国の独立に伴って、各地でイスラーム主義組織が形成されたことが詳述され、運動の着想、目的、支持基盤の違いについて分析が加えられる。その幕開けは、1991年のアダーラトによるナマンガンの共産党州委員会の建物の占拠事件であるが、ここで重要なのは、政

権がこのような宗教組織の存在を、逆に自らの権威の正当化のために利用するようになった点であろう。本章では最も注目すべき3組織について検討が加えられる。タジキスタンでは、ソ連末期にイスラーム復興党(IRP)が出現し、1992～97年の内戦において「反対派」側に立って戦い、重要な役割を果たした。彼らは後にアフガニスタンに逃れたが、和平締結後は、新政府の重要な地位についている。ウズベキスタン・イスラーム運動(IMU)とヒズブッタフリール(HTI)はウズベキスタンで起こった組織である。IMUは、アダーラトの解散後、タジク内戦やアフガニスタン戦争への参加を経て、1990年代末に結成された組織である。しかし、その主張は理論的ではなく、国内でも人気はないと分析する。一方、HTIは歴史ある国際組織であるが、中央アジアには1990年代半ばに到達し、本格的な成長をした。中央アジアの諸政府はこの組織を過激派であるとして禁止したが、民衆の間でかなりの支持を得ているという。3組織とも、国際的なリンクを持ちながらも、国内政治問題に焦点を当てて活動していること、そして、ソ連崩壊後の政治秩序に不満を抱いているが、その内容には差異があり、三者が共同で「政治的イスラーム」を目指すものではないと分析している。

第7章においては、独立諸国のイスラーム政策について、ウズベキスタンに焦点を当てて検討している。1993年にSADUMは「ウズベキスタン・ムスリム宗務局」(MBU)に変更された。政権は宗教組織の統制のために新しい法律を發布し、すべての宗教組織を登録制にするとともに、「過激派」、「原理主義」などの言葉を巧みに用いて、宗教教育にも統制を強め、宗教施設を閉鎖し、アダーラトや他の類似組織を禁止している。この統制は厳しく、1930年代の大粛清時代を彷彿とさせると述べる。一方、アメリカはアフガニスタン戦争のためにウズベキスタンを協力者とし、共同で「対テロ戦争」を行ったが、これはウズベキスタン政府に宗教組織統制の強化を促進させたと指摘する。カザフスタンやタジキスタンも似たような状況であり、トルクメニスタンに至っては、大統領自身の神格化が行われていることが

触れられる。著者は、独立中央アジア諸国はこのように、イスラームを国家から孤立させており、それはムスリム世界でも異例のことであると分析し、その要因をソ連体制の遺産に帰している。

結論では、2005年5月のアンディジャン事件について触れている。この事件は市民の不満が限界に達した結果であるが、カリモフ政権にとっては、『『過激派』が国家秩序を乱してシャリーアに基づいた国家を樹立しようとした試み』であった。犯人は、HTIの分派であるアクラミーヤであり、地元勢力が外国勢力と共謀して周到に準備した反乱であるとされた。これによって、HTIがテロ組織であることも再確認された。しかし、著者は、アクラミーヤの実態や創設者アクラーム・ヨルダシェフの著作を検討し、メンバーは敬虔なビジネスマンであり、ヨルダシェフ自身も伝統的なイスラーム教育を受けていない独学者にすぎず、著作には国家やシャリーアについては一切触れられておらず、ましてやHTIとの関係も見出せないと述べる。彼らが起こした事件は確かに武装蜂起であったが、イスラーム活動家のそれではなく、イスラーム的なスローガンは反乱の前後を通じてみられなかったと分析する。本書での考察から、中央アジアには地域経済の停滞や汚職など、多くの潜在的な不安定要素があるが、イスラームの闘争心は低い位置にあると指摘される。しかし、中央アジアにおけるこれまでのイスラームのあり方自体がそうであったように、これからのイスラームの文脈も変わり得るのであり、様々な不満がイスラーム活動家に力を与える可能性は否定できないと指摘して本書を締めくくっている。

巻末には参考文献表、索引以外に用語集が附せられており、イスラーム法学の専門用語や中央アジアにおける政治グループなどに関して簡単な説明がある。

II 総評

上にみてきたように、本書は、ソ連の成立前からソ連崩壊後にかけての中央アジアのイスラームをめぐる状況の変化を追った興味深いものである。著者

は、欧米社会の多くの観察者は、イスラーム世界をひとつの文化圏と捉えがちであり、中央アジアの辿った歴史を無視し、安易に「(アル・カーイダと結び付くような) 国際的な」、「過激な」、「原理主義的な」ものというレッテルを貼っていると痛烈に批判している。ハーリドは、このような欧米社会で支配的な解釈に異議を唱え、70年間のソ連体制が中央アジアのイスラームを「世俗化」させ、「慣習」や「伝統」に変容させたこと、その結果イスラームはソ連時代に創出された強力な民族アイデンティティよりも劣位におかれるようになったこと、そして現在の独立諸国家がそれらを継承し、「イスラーム」を政権の権威の正当化に利用していることを読者にわかりやすく説明している。

本書は、中央アジアやイスラームの知識をあまり持たない一般読者にもわかりやすく解説した概説的なものであり、そのすべてが著者の専門的な研究の成果ではない。本書でも詳解されているダームラー・ヒンドゥースターニーのような活動家や、IRP、IMU、HTIなどのイスラーム組織については、すでにこれまでも、中央アジア内外から詳しい紹介や専門的な分析も出ている [Abashin 2002; ババジャノフ 2003; 小松 2004; Babadzhonov, Muminov and Olcott 2004; Naumkin 2005]。そのなかには、ここでハーリドが分析しているのとは異なる結論を出しているものもある。例えば、ウズベキスタンの研究者ババジャノフは、アンディジャン事件の首謀者アクラミーヤについて、彼らが実際にジハードを目指す過激な思想を持っていたことをヨルダシェフの著作を分析して証明している [Babadzhonov 2006]^(註1)。しかし、これまでの研究はそれぞれの人物や組織の活動に焦点を当てたいわば各論であり、本書はそれらをまとめて長い歴史スパンにおいて包括的に分析している点では高く評価されるべきであろう。著者は、ソ連末期からモスクワやタシュケントなどに長期の滞在経験があり、多くの観察記録やインタビュー調査に基づいた議論は、興味深く、説得力があり、また、収集利用された資料の多様さ、豊富さは類書に抜きん出ているのも魅力のひとつであろう。

本書は、旧ソ連地域のイスラーム組織の多くが、現在の中央アジア諸国に蔓延する深刻な国内問題の解決を目指すものであり、欧米の知識人が捉えてきたように、これらの組織を安易に国際的で過激なものとは結び付けるべきではないと指摘している。しかし、ソ連崩壊によって他の世界との接触が急激に活発になった中央アジアのムスリムたちが、国際組織の目指す思想への協調をますます強める可能性がないとは言えないのも事実である。現時点においては、イスラーム組織の活動は、政治体制や社会停滞に対する不満のあらわれであるかもしれないが、これらの「中央アジアのイスラーム」が、ここで論じられた「中央アジアのイスラーム」のままであり続けるかどうかについては、著者も最後に述べているように、疑問として残されている。このような点で本書は、中央アジアに限らず、世界の各地域のイスラームに関心を持つ読者にとっても、多くの興味深い示唆を与え、新しい視座を提供してくれるであろう。

(注1) ただし、ハーリドは執筆時において、本書と同時期に出版されたババジャノフの論考をみていないと考えられる。両者の見解の相違は利用した史料アクラム・ヨルダシェフ著『信仰への道』の版の違いによる。ハーリドはインターネット・サイトに掲載されたテキストを用い、この著作には急進的な思想も国家やシャリーアに関する記述も見出せないと述べている。しかし、ババジャノフによると、著作にはいくつかの版や翻訳が存在し、大幅な削除がなされたものもあるという。したがって、ハーリドの利用したテキストが、過激な部分を削除した版だった可能性が高い[Babadzhanov 2006, 65-69]。

文献リスト

<日本語文献>

小松久男 2004. 「中央アジアにおけるイスラーム復興」

片倉もとこ・梅村坦・清水芳見編『イスラーム世界』岩波書店 72-97, 282-284.

ババジャノフ, パフティヤール(小松久男訳) 2003. 「ソ連解体後の中央アジア——再イスラーム化の波動——」小松久男・小杉泰編『現代イスラーム思想と政治運動』(イスラーム地域研究叢書2) 東京大学出版会 167-193.

<外国語文献>

Abashin, Sergei 2002. "Islamic Fundamentalism in Central Asia: Why It Appeared and What to Expect." *Central Asia and the Caucasus* 2(14): 63-69.

Babadzhanov, B. 2006. Kto po tu storonu barrikad? (O sekte Akramiia i ei podobnykh) [敵の陣営にいてのは誰か (アクラーミーヤとその類似諸派について)]. *Rasy i narody* Vol.32: 42-106.

Babadzhanov, B.M., A.K. Muminov and M.B. Olcott 2004. "Mukhammadzhan Khindustani (1892-1989) i religioznaia sreda ego epokhi (predvaritel'nye razmyshleniia o formirovanii 'sovetskogo islama' v Srednei Azii) [ムハンマドジャーン・ヒンドゥースターニー (1892-1989) と彼の時代の宗教環境 (中央アジアにおける「ソビエトのイスラーム」の形成についての予備的考察)]." *Vostok (Oriens)* No.5: 43-59.

Khalid, Adeeb 1998. *The Politics of Muslim Cultural Reform: Jadidism in Central Asia*. Berkeley: University of California Press.

——— 2003. "A Secular Islam: Nation, State, and Religion in Uzbekistan." *International Journal of Middle East Studies* 35: 573-598.

Naumkin, Vitaly V. 2005. *Radical Islam in Central Asia: Between Pen and Rifle*. Lanham: Rowman & Littlefield.

(日本学術振興会特別研究員, 東洋文庫)